



人が輝き 地域と活きる “わ”のまち 犬山

魅力はいっぱい



地元民と事業者の交流

栗栖継鹿尾

あとは課題をどう活かす？

栗栖は昭和30年代から50年代にかけて、桃太郎伝説を舞台にした桃太郎神社や公園、木曾川の河川敷などに多くの観光客が訪れ、栗栖に至る1本しかない木曾川沿いの県道は、子どもたちの遠足の列でにぎわっていました。平成に入ってからは、人気に陰りが見え始め、市観光協会の資料によると観光客も最盛期の574,000人（昭和60年）から今は54,878人（平成24年）と、約10分の1以下に減少し、一時の勢いがなくなっています。

地元の発展会などでは、「子どもの日」の5月5日を中心に桃太郎祭りやユアユ祭りなどを計画し、人気を取り戻そうとしています。参加者も地元中心の域を超えられず、広がりを見せています。なんとか打開策を探ろうと、西村教授のアドバイスを求めたもので、同教授は講演の中で次のように話しています。栗栖は1本しかない県道が

行き止まりになっていて珍しい集落で、おそらく600年以上、変化していない閉じられた空間であると同時に、山を背にした三日月型の広がりがある空間です。散在する住宅と農地があり、14、15世紀のな昔の姿が残っています。桃太郎伝説の地であるだけに桃太郎神社の桃太郎やたっさんの鬼の石像、忠魂碑や火の見櫓が活かしている栗栖神々

このため出店者らが中心の「栗栖継鹿尾」を楽しくする会」には、地元住民も入って将来計画の議論を重ねたり、バスによる先進地の視察を行うなど、栗栖継鹿尾の活性化に向けた活動を続けています。この他、野狼公苑の跡地の再利用、継鹿尾も含めた地元農業者と出店者とのコラボ（共同作業）によるゴボウや黒大豆など地元産を利用した名物料理の開発、観光農園の計画、休耕田の有効活用、生産から販売までを手掛ける6次産業化など、栗栖を蘇らせるヒントは山のようにあります。課題はこれらをどう活かすか、ではないでしょうか。これらを解決すれば、若者も栗栖の魅力にひかれ住みつくなど、再び昔のにぎわいが戻ってくる可能性も十分あります。

この景色を毎日眺めながら自転車で通学する中学生は幸せです。日本ラインの名付け親である志賀重昂も、同じくその鳥瞰図を描いた「大正の広重」の吉田初三郎も、この地を絶賛している通り、日本でも屈指の景観です。このように栗栖は第一級の個性あるまち。学べるところもたくさんあり、名古屋まで

1時間で行ける地の利も良く、自信を持っていい。外部からの少しの手助けで、自立できるポテンシャル（潜在価値）は十分あり、あとはそれをどう活かせるか、みんなさんのヤル気次第です。現在、栗栖では前から住んでいる地元民と、主に外から栗栖へ来て仕事をしている出店者らの間に温度差があり、この垣根をはずし両者が一体となって栗栖の観光や住環境を盛り上げる必要に迫られています。

楽しくする会の若杉会長も「栗栖継鹿尾を生活の場とする人々すべてが仲良く共生しながら、栗栖の魅力を外へ発信することにより、もっと観光客を呼び込むことができ、同時に栗栖継鹿尾の住民の生活に潤いを持たせることができると思います。何とか頑張りたい」と話しています。

がんばろう！



桃太郎



犬



おばあさん



鬼



5月5日の桃太郎まつり

栗栖・継鹿尾

まちづくり

「犬山の桃源郷」とも呼ばれる栗栖に、かつてのにぎわいを……。城下町を初め桑田、羽黒などの歴史を活かしたまちづくりが着々と進んでいる中で、栗栖が苦悩しています。こんな中、12月25日、まちづくりの権威である西村幸夫東京大学教授が栗栖を対象とした「歴史と自然を活かしたまちづくり」について講演しました。

この中で同教授は「栗栖は個性ある第一級のまち。もっと自信を持っていい」と太鼓判を押しました。このお墨付きにより、行政や住民、事業者（出店者）らの協働作業によるヤル気次第ということになり、今後の地元の活動が注目されます。